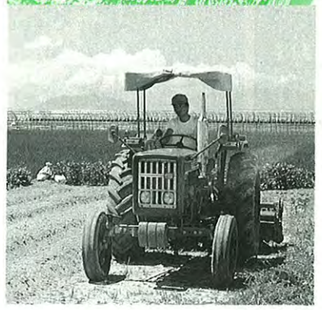


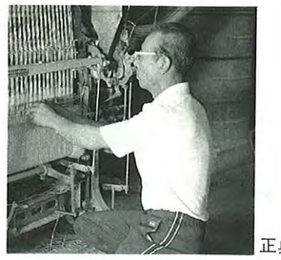
イ草づくりは、土づくり。

八代郡鏡町

河原 才喜さん（88歳）
正典さん（56歳）
正幸さん（31歳）

畳の上にゴロリと大の字になる心地よさ。適度なクッションとサラリとした感触。体中から、スーッと疲れが抜けていくような、優しさと安らぎ。最近は、通気性や、背骨への影響など、健康の面からも、畳の良さが見直されてきている。

熊本は、その畳の原料イグサの最大の生産地。全国の七〇％以上を占める。そして、熊本県の全生産量の約八〇％を占めるのが八代。八代郡鏡町北新地の河原さん一家も、その生産農家のひとつだ。昔ながらの広い農家の屋内に一歩踏み入ると、びっしりと敷きつめられたみごとな畳。今年の春に換えたばかりとか、さすがイグサ農家という感じだ。



正典さん

イグサと言えば、夏の炎天下の刈り取り風景は知る人も多いが、その他の地味な仕事は、あまり知られていない。イグサは、畑と水田とで、一年を通して育苗し、株分けして増殖される湿地性の多年草。真冬の本田への植え付けから、刈り取った後の泥染めまで、かなり手がかかる。

「イグサは、とにかく根づくりです。冬の水管理。肥料を入れるタイミング。根さえしっかりしていれば、取り入れ前、グーッと一挙にいい芽が伸びます。」という河原家の農業には、ひとつのポリシーがある。それは、土づくり。「土が死んでいたんでは、当然いい根はできませんからね。イグサづくりは土づくりから。もちろん、これは作物づくりすべてに言えることですが。」

最近、全国的に土の問題が叫ばれているが、河原さんのお宅では五年程前から酪農家と契約。堆肥による土づくりに取り組んでいる。健康な土で育ったイグサは、後になってかなりの違いが出てくるという。使っているうちにツヤが出るし、第一に持ちが違う。

「自然の力に比べれば、人間の力なんかわずかなもの」根っからの〝生きもの好き〟で、永年農業に従事してこられた才喜さんの実感を、今、正典さんや正幸さんも痛感している。

正幸さんと奥さんの利志子さん

イグサは、これまでの畳としてはもちろん、最近新しいインテリア用品としても期待が寄せられている。若い正幸さんの理想は、熊本の畳やイグサ製品が、将来、全国のデパートで気軽に買えるようになること。流通機構が旧態然として複雑なだけに難しい問題もあるが、「生産者として、いまの消費者に求められる質の高いイグサをつくりたい」と張り切っている。

河原さんご一家のイグサづくりは厳しい労働と共に、親子三代にわたって受けつがれてきた。そして今、その丹精込めて作り上げられた製品は、香り高い伝統の美とくつろぎを、日本中の住まいへ広げている。

才喜さん